

「今日を最後にする」

杜愔とくに呼ばれた興仁きん貴きは、黙って肯いた。

陽が昇って一刻ほどは経っていた。爽やかな風が山肌を撫でて、春らしいうらかな一日を予感させた。

「もう、この戦いくさを終わらせよう。何のための戦だったか、どうして戦になったのか、そんなことはもういい。ただ、儂おれはそう思ったのだ。儂は宋雪華そうせつかに会う。そして話がしたい。敵としての出会いではあるが、それも運命うちなづかだったのだとな」

杜愔の目は澄んでいる。迷いも見られなかった。

「今日の戦は」

興仁貴が訊いた。

「全力を尽くす。それが、あの者達への礼儀だ」

杜愔がきっぱりと言った。

「分かりました。武人としての誇りをかけて、全力で戦に向かいます」

「ただ、人死ひとしには少ないようにせよ」

「心がけます」

興仁貴は、思わずほっとしている自分に気付いた。敵ではあるが、殺したくはない。いつからか興仁貴は、そんな想いをいだくようになっていた。

「大変かもしれぬが、興仁貴、やってくれぬか」

「御意ごい」

興仁貴の答えは一言だった。

興仁貴が去った後、杜愔は一人で幕舎を出た。まだ朝の爽涼な風が、辺りを吹き抜けている。

斥候せこう兵へいが馬を走らせて来るのが見えた。

「経略使様。開封府禁軍が」

兵士は馬を降りるやいなや、大声で叫んだ。

「やはり、来たか」

黄文柄が、開封府に使者を出したことは分かっていた。ただ、開封府が本気になるかどうかは分からなかった。どうやら、開封府、すなわち宰相蔡京は、事態を重く見たようだった。それとも、太原府駐屯禁軍、すなわちこの自分が侮られたか。どちらでもいい。杜愔はそう思った。ただ、この春の穏やかな陽の光に、開封府禁軍は似合いそうにない。それだけは感じていた。

「およそ二千」

いくらか息を整えて、斥候兵が言った。

「二千か……微妙な数だな」

確かにどうとでもとれる数だった。本気で介入する気なら、五千は送ると思われる。それで、自分達太原府禁軍を下がらせる。しかし、二千となると、ただ要請されたからそれに応える、それだけともとれる。それも、自分達と共同戦線を張ってだ。

「分からない。蔡京は何を考えておる」

杜愔の心は重くなった。せっかく、乾坤一擲の戦いを始めようとする朝に、いかにも無稽な邪魔が入ったように思えた。見事な者達との、人生最後のかけ引き。昨日の夜から、杜愔はそれを心待ちにしていた。

「接触したのか」

「はい」

「將軍は」

「呉秉彝將軍。副将は陳隆都虞侯」

「呉秉彝……最近將軍に昇った男だな。陳隆は知っている」

呉秉彝については、ほとんど知識がなかった。まだ若い、將軍に昇ったばかりのはずだ。とすると、若い將軍に戦歴を与えるための出動か。それならば理解出来る。今後の昇進のためのはく付け。開封府禁軍がよくやる手だった。大したことのない事態に出動し、さも大功を立てたように報告して、戦歴にはくを付ける。馬鹿馬鹿しいことだが、將軍達の、一種の慣行のようになっていいる。陳隆は老練な副将だった。禁軍を統括する童貫元帥の信任も篤い。將軍に昇る望みはないが、し

ばしば新任の將軍の副將を任され、大過なく支え続けてきた実績もある。

「問題は陳隆だな」

杜愔は呟いた。

陳隆には、好ましからざる噂もあつた。禁軍の中には、賊徒や無頼の徒もいる。飛熊隊だとか、竜虎隊だとか、名前だけは勇壮なものをつけられているが、実態は禁軍の鼻つまみ者だった。投降した賊徒や無頼漢を、街に野放しにするわけにいかず、軍の中に閉じ込めておくのが狙いだった。そういう点では、浮浪者対策で軍という組織に縛り付けておく、廂軍と似てなくもない。ただ、禁軍に組み込まれた賊徒達は、廂軍のように大人しくはない。必然的に、本来の禁軍との間に軋轢が生じている。そこで、童貫や、その次に位置する高俅、楊戩達が思いついたのが、訓練や出動中に、賊徒出身の禁軍兵を死なすことだった。きわめて自然に見せてはいたが、注意深い者には気付かれていた。やがて噂になっていったが、童貫らのもみ消し工作もあり、今ではあまり聞かれなくなっていた。そうした噂の中で、陳隆のことを聞いたのだ。渡渉訓練の最中に川の堰を破って、五百近くの兵を溺死させたという噂だった。真偽のほどは定かではないが、そうしたことが言われるような男だということだろう。

「注意が必要だな」

杜愔は呟いた。その後陳隆は、童貫の信任がより篤くなつたということだ。気を抜けない。そう杜愔は思った。

杜愔は、薄青に輝く空を見上げた。最後を締めるに相応しい、爽やかな空だった。周囲の喧騒も気にならなかつた。具足を身に付ける音、馬に鞍を載せる音、兵士達の話し声、それらすべてが心地よかつた。

「儂はやはり、軍人であるしかない」

杜愔は、そう自分に言い聞かせた。

•
•
•

公孫勝は陳統を呼び出していた。手には二枚の鏡を持っている。

「塘に行つてほしい。この鏡で連絡を取り合う。おまえが一枚持つて行き、堰を壊す準備が整ったらこれで合図を送つてほしい」

「へえ。銅鏡じゃない鏡ははじめてだよ」

そう言つて陳統は、しげしげと鏡を見詰めていた。

「玻璃の裏に銀を塗つてある。銅鏡とは比べ物にならぬほど、陽の光を反射する。こちらから光を返したら、それが堰を破る合図だ」

公孫勝の言葉に、陳統は黙つて肯いた。

弦月に乗つた陳統の後姿を見送ると、公孫勝は雪華の小屋に向かつた。小屋の手前で、黄玉が剣を振つているのが見えた。

「黄玉、今日一日くらいは大人しくしていられないのか」

あきれつつ、公孫勝が言った。昨夜、絹糸を抜いたばかりだった。

傷は、思つていたより早く付いていた。黒死軍との死闘で受けた傷は、皮をかすつた程度でしかなかった。恐るべき勘のよさを持った娘だった。身体で感じて避けるというより、ほとんど皮膚感覚で身を護つてゐるのだろう。誰にでも、努力すれば得られるというものではない。持つて生まれた才、そう思うしかない。

「公孫勝様、身体が喜んでいきます。少しすれば、また前と同じように動けると思います」

黄玉が、朝日の中で笑つた。眩しそうに、公孫勝が目を瞬かせた。

この娘は、凄まじく強くなる。公孫勝はそう思つた。李逵も自分も、今はまだこの娘より上だ。だがこの娘の強さは、これから伸びていく強さだ。自分達は、これから落ちていく強さだ。

公孫勝の脳裏に、一人の男の顔が浮かんだ。強い男だった。心も身体も。男に請われて、珍しく試武に応じた。男の目に、邪気が見られなかったことと、この男と戦つてみたい、純粹にそう思ったからだつた。一刻ほども戦つて、決着はつかなかった。男が尊敬の目を向けた。公孫勝も、はじめて勝てなかった。弟子にしてください。男はそう言つて拝礼した。公孫勝は、教えることなどないと言つて断つた。事実、男の槍術は、完璧と言えるほどのものだった。槍を執つて、この男の

右に出る者はいないだろう。本気でそう思った。あと一刻続けていれば、男の槍をかわせなかっただろう。それはどうしようもない年齢差だった。男は三旬の半ばほど、自分は五旬に近かった。

男と出会ったのは、遼内の錦州※の近くだった。北でなければ採れない薬草を探しに、遼の中京大定府※に向かう途中だった。野宿の場所を見繕っている時に、男と会ったのだった。話し合って意気投合した。なかなか学問もあり、公孫勝の話を食い入るように聞いていた。次の日、試武を請われたのだった。前夜から、男の持っている槍の腕が、相当なものだということは見当がついていた。男はここ数年、旅を続けながら自らの武を磨いてきたのだと言った。何のために。公孫勝の問いに、誇りを守るために。そうとだけ、男は答えた。男の目の中に、真摯なものが見えたので、珍しく公孫勝がそれに応じた。もう十年以上もないことだった。若い頃は、墨家の鉅子として、また自らの武を試すために、頻繁に試武に応じた。もちろん、一度も敗れたことはない。それは、墨家の鉅子としての宿命だった。個の武として不敗。それは、暗黙に課せられた鉅子の条件だった。

※錦州 渤海北方の遼の都市。※中京大定府 遼の大都市。錦州西の内陸側。

だがいつの頃からか、公孫勝はそうした武を究めることに、虚しさを感じるようになっていた。武は、突き詰めて言えば、所詮人を殺す技術だった。それよりも、人を生かす技術の方に心が傾いた。それで、医の道に入った。幸い、墨家の教えには、医のこと、特に傷の手当てや薬に関するものが少なくなかった。九天玄女に会い、太医局の医師にもついた。特に小方脈科の錢乙には、教えられることが多かった。九天玄女にどうしてそんな力があつたのかは、深く考えなかった。ただ、話し方や物腰から、宮廷にいたであろうことは察することが出来た。

そうして男に出会い、試武に至り、深く友情と言える感情を持ち合った。それが、三年前の思い出だった。男は、何か期するところがあるようで、三年以内に行動を起こすと言っていた。何をするのかは聞かなかったが、男の為そうとすることに誤りはないだろうと感じた。

黄玉の剣舞を見て、公孫勝は不思議とその男に会いたくなくなった。三年。男は何事かを起こしているだろう。それを見に行きたくなった。幽州※に行く。男はそう言っていた。額が狭く、豹のような精悍な美男だったので、公孫勝は、その男に豹子頭ひょうしづという綽名あだなをつけた。男は気に入ったようで、それを綽名として使い続けると約束した。そのまま別れたが、公孫勝の心の中に、深くその名が刻み込まれた。林冲りんしょう、それが男の名だった。

※幽州 燕京ともいう。遼では南京析津府と呼んだ。今の北京。

「公孫勝様、いかがなされました」

黄玉が、訝いぶしげな目で公孫勝を見ている。

「いや、何でもなし。黄玉、おまえの剣舞が美しくて見とれていた」

公孫勝がそう答えると、黄玉は頬を染めて俯うつむいてしまった。

公孫勝は小屋に入った。黄玉もそれに続いた。

中では、雪華が身体を起こしていた。九天玄女がいた。石勇、晁蓋もいた。曹瑛は、黄玉が寝ていた牀とこで、まだ眠り続けている。陳達と聞起は、既に一の木戸に向向いて、禁軍と対峙しているはずだった。平真は、小屋の外で禁軍の方を眺めていた。

「雪華殿、あと三日ほどで糸が抜ける。もう少しの辛抱だ」

公孫勝が言った。

「ありがとうございます。公孫勝様のおかげで、わたしはここまで回復することが出来ました。感謝の言葉もありません」

雪華が深々と頭を下げた。

「いや、私だけではない。黄玉が自らの皮を差し出した。そして、多くの者達が戦ってくれた。私も感謝している」

「わたしは、ここにいるすべての人達に感謝しています。誰一人欠けても、今のわたしはなかったのだと思っています。本当にわたしなんかのために、大変な迷惑をかけてしまいました」

「そんなに気にしなくてもいい。この砦とりでに籠こもったすべての者が、皆自らの意志で戦ったのだ」

「そうだ、天魁の星よ。気に病むことはない。総ては天の運命ぎんめい。こう

して集まり戦うことこそ、おまえ達天の星地の星の巡り合わせなのだ」
九天玄女が巖かに言った。誰一人として、それに異議を唱える者は
いなかった。

「姉様、わたし達は自らの意志でこうしているのです。どうか、そん
なふうになさらないでください」

黄玉が、哀願するように言った。曹瑛を起こさないようにと、皆声
は小さかった。

「わたしは、皆から受けた恩を忘れません。でも、それに拘りすぎな
いようにとも思います。この恩は、これからわたしが返していかなけ
ればならないもの。そう思っています」

「分かった。これからの雪華殿の生き様、それをしっかりと見させて
もらおう」

公孫勝がきつぱりと言った。これで、この話は終わり。そんな調子
だった。

「それよりも、雪華殿。今日、塘の水を落とす」

皆が、固唾を呑むのが分かった。

「何時」

黄玉が訊いた。

「皆の準備が出来次第」

「とうとうと」

晁蓋だった。傷の痛みはあるが、意識はしっかりしていた。

「この間の嵐で、水は大量に溜まっているだろう。それを落とすのだ
から、砦もただでは済まない。ここ的小屋は、すべて流されると思っ
た方がいい。雪華殿をはじめ、全員が砦の左右に避難しなくてはなら
ない」

「そういうことか」

晁蓋も納得した。

「雪華殿は、石勇が抱く。石勇なら雪華殿一人くらい、猫の子を抱く
ようなものだ。曹瑛は、もう少ししたら起こしてもらいたい」

石勇が無言で肯いた。晁蓋が少し羨ましそうな顔をした。

「いよいよだな」

九天玄女が呟いた。

「はい。これで決着がつくかどうかは分かりませんが、これまで守りしか出来なかったのが、初めて攻めに転じることが出来ます。もちろん、曹瑛が黄文柄を倒したことも含めてですが」

そう言つて、公孫勝は曹瑛の横顔を見つめた。安らかな寝顔だった。「よくここまでもつたのだ」

九天玄女が感慨深げに言った。

「宋家党の者達をはじめ、皆が心を一つにして戦ったおかげです」
公孫勝は満足そうだ。

「私の一族でも、こうはいかなかったでしょう」
そうも付け加えた。

「梁山泊には、墨家の者すべてが入っているのか」

九天玄女が訊いた。

「二千ほどが。残りは、玄女様が教えてくださった銀鉾や銅鉾に行つております」

「そうか。暫く訊いていなかったのだな。それで、どのくらいだった。」
「かなりのものでした。特に銀鉾は、かなりの埋蔵量があると、手の者が言つておりました」

「時遷の集めた職人達はどうか」

「皆、よく働くということでした」

「それはよかった。国からはみ出した鉾山師達だ。心配していたが、杞憂だったようだな」

「時遷殿が選ばれた者達です。信頼に足ると思います」

「宋家党の資金源は心配ないということだな」

「はい。今の鉾山だけで、五万の人間を十年、もたすだけはありません。玄女様の言われた他の鉾山を開鑿するとなれば、どの程度になるかは計り知れません」

「この時のために、私の頭の中だけに仕舞ってきた。もともとは、父王安石が命じて探し当てた鉾山だ。すぐに父が失脚したので、当時の

者達で知っておるのは私だけになってしまった。天魁の星のために使うのなら、父も喜ぶだろう」

「民のため、ということですか」

「入雲竜、おまえには苦勞をかけておる。だが、おまえ以外こうしたことを頼める者が、今は見当たらぬ」

「時遷殿が」

「時遷の才が、そちらにないことは分かっておろう。おまえと、墨家の力が必要なのだ。ただ、世を避けて生き延びるのだけが、墨家の生き方ではないだろう」

九天玄女の言葉に、公孫勝は何も言い返せなかった。確かに、これまでのように世から隠れて生きて来たことは、墨子の教えとは相容れない。自分達は何をしてきたのだろう。梁山泊に拠点を創ったのも、鉞山を開いて銀や銅を精錬したのも、すべて九天玄女の教えによるものだった。人は出していた。だが、肝心なところは時遷の手配に頼っていた。これから墨家が、本当に墨子の末裔として生きるには、一体どうすればいいのだろうか。今、公孫勝を悩ませているのは、まさにそのことだけと言える。

「人も必要です」

公孫勝が言った。

「そうだ。人こそ大事だ。金のことは心配ない。銀や銅が駄目になっても、私が他の道を考える。場所は梁山泊、あそこしかありえぬ。問題は人だ。今のままではあまりに少ない。墨家や侠の者達を併せても、とてもこの国に対抗することは出来ぬ。腐っているといても、まだまだこの国は強大だ。人が足りぬ。集めねばならぬ」

「宋雪華殿のもとに」

「そうだ、天間の星よ」

「思い当たる者がおります」

「そうか。おまえの目になつたのなら、まず間違いはあるまい」

九天玄女の目が、輝きを増した。

「ここが片付いたら、幽州に行ってみます」

「幽州におるのか」

「おそらく。時遷殿もつかまれてはいない者です。三歳前、菓草採りの旅で、偶然に出会いました」

「そうか。それでどのような者だ」

「一騎当千。まさしくそのような男です。心に邪気もない。真つ直ぐな男です」

公孫勝は、確信を込めて言った。九天玄女は、嬉しそうに肯いた。

「星になれるか」

「分かりません。何か、為さねばならないことがあるようでした」

「焦らずともよい。縁があれば、きっと会うこともあるだろう」

「まさしく」

二人の会話を、雪華が怪訝そうに聞いていた。

それに気付いて、九天玄女が雪華に向き直った。

「天魁の星よ、おまえに訊いておきたいことがある」

あらたまった言葉に、雪華は思わず身を正した。

「ここを抜けたなら、おまえはどうするつもりなのだ」

雪華は一瞬戸惑った。そういえば、今をどうするかに気を取られ、この先のことには頭が回っていなかった。

「まだ……考えていません。とりあえずは、阿骨打將軍との約束があります。もしこの窮地を逃れられたら、西に行ってみようかと思えます。そこまでしか」

「西というと、田虎か」

「はい。それが動いて、遼兵を引き付けるようになれば」

「女真族にとつてはありがたいな」

「玄女様は、阿骨打將軍のことを」

「時遷から聞いている。女真の民が自立を願うのは当然だろう。遼は、あまりに女真の民を軽んじすぎた。今は、女真の族長は阿骨打の兄の烏雅束だが、民の心、兵の心、共に阿骨打にある。弟の呉乞買も、阿骨打に心酔している。阿骨打が名実共に族長となれば、女親族は遼に叛旗を翻すだろう」

「阿骨打將軍もそう言うっておられました。民のために、礎いしづえになると」
九天玄女は、軽く苦笑いのような表情をした。

「乱を起こす者のはじめは、大義を掲かげておるものだ。それが成功し、自らが権力者になった途端、大概は腐敗するものだ」

九天玄女の目には、皮肉の色が浮かんでいる。

「阿骨打將軍もそうなる」と

「それは分からぬ。そうでないことを祈るだけだ」

雪華は顔を伏せた。そういうことも、考えておかなければ。しかし、今は阿骨打の真摯まじな目を信じたい。自分の直感を信じたい。

「わたしは信じています。いえ、信じたいのです」

「それが、おまえのよいところだ。何もかも疑う生き方など、虚しいとしか言えぬからな」

後の方の言葉は、まるで自らに言い聞かせているようだった。

「天魁の星よ。おまえは、阿骨打の生き方に賛同したのなら、なぜ、自らも立とうとせぬ。遼における女真族と、宋における民との間に、どれだけの開きがあるというのだ」

「それは……」

「答えられまい。何の変わりもないからな。いいか、権力というものは、永く続けば続くほど、腐敗の度を深めるものなのだ。遼も宋も、永く続きすぎたのだ」

九天玄女の目は輝きを増している。

「わたしに、立てと」

雪華の言葉に、黄玉が大きく頷いた。

「そうだ、天魁の星よ。おまえは立たねばならぬ。民のために、新しい世のために」

「玄女様。わたしはただの田舎娘です。何の力も、とりえもありません。わたしごときに、そんなことが務まるはずがありません」

雪華は、真剣な目で言い募もった。

「務まるかどうか、ふさわしいかどうか、それを判断するのはおまえではない。のう、天貴の星よ」

九天玄女に同意を求められ、黄玉は喜んで口を開いた。

「姉様、立ちましよう。姉様なら出来る。この腐りきった宋という国を捨てて、民のための国を創りましよう」

黄玉の目は真剣だった。

「民のための国……それって、新しく国を創るっていうこと」

雪華は呆然となった。この国を捨て、新しい国を創る。そんなことが出来るのだろうか。

「雪華よう。俺も保正の息子だった。役人のやり方は、小さな頃から見続けてきた。もうこの国は駄目じゃないかって、ずいぶん前から感じていたんだ。この国を立て直す。そんなことは、もう手遅れだと思っ
うぜ」

晁蓋が、珍しく真面目な顔で言った。

「新しい国か……」

公孫勝は、頭を殴られたような衝撃を覚えた。なぜ、それを考えなかったのだろう。墨家の者が、今の世に受け入れられないのなら、別の世、別の国を打ち立てればよいではないか。それは、民が希望を持って暮らせる世であるべきだ。公孫勝は、心のどこかが雄叫びを上げるのを感じた。

「姉ちゃん、俺も玉姉ちゃんや晁蓋と同じ考えだ。国がしっかりしてたら、俺達の村はあんなふうにはならなかった。絞り上げられるだけ絞り上げて、いざ守ってほしい時には何の役にも立たない。宋なんて、そんな国さ。俺はどんなことがあったって、雪華姉ちゃんについていく。でも、その姉ちゃんが新しい国を創るって言うんなら、こんなに嬉しいことはないと思う」

石勇が雪華を見て、照れたように顔を伏せた。

「石勇……」

雪華は、そのまま黙り込んでしまった。

「姉さん」

牀の方から声がした。

「曹瑛、目が覚めたの」

皆が、一斉に曹瑛を見た。

曹瑛は、上掛けをどけて牀から立ち上がった。まだ病み上がりのような顔色だったが、目には力が漲っていた。

「姉さん、このままでは駄目。こんな世を、放っておいてはいけないわ。いえ、こんな世が好きで、そこにいたい者にはいさせればいい。でも、そうでない者のために、誰かが立ち上がらなくてはいけないの。誰も立ち上がらないのなら、姉さん、わたし達がやりましょう」

曹瑛が、似合わないほど力強く言った。

「曹瑛、あなたまで……」

「聞起も陳統も同じ。もちろん李達様も」

「俺もだ」

晁蓋が同意したが、誰も注目しなかったので拗ねたように横を向いた。

「雪華殿、今すぐ答えを出す必要はない。私は李達殿とは古い友人だ。李達殿は、この誰よりも雪華殿に立ち上がってもらいたがっている。私にはそれがよく分かる。だから李達殿の代わりに、敢えて言わせてもらう。今でなくともいい。だがいつの日か、そう遠くない先に、立ち上がってほしい。民のために、そして自らのために」

公孫勝が静かに言った。

「ほう。入竜雲、おまえもようやく心を決めたか」

九天玄女が、笑みをたたえながら言った。

「玄女様、私は……」

「よいよい。天間の星、おまえが助けなくてはことは成らぬ。天機の星とともに、おまえの役割は重要なのだ。いや、今後を左右すると言っている」

「天機の星とは」

「天間の星と共に、王佐の才※を有する者。知略に長け、信を心に持つ者だ。入雲竜、おまえは他にも為さねばならぬことがある。だから、そのように多くの才を授かって生まれて来た。そして、その才を総て開花させるために、五旬※という歳月を必要とした。百八つの星の中

で、おまえほど、多くの才を有している者はおらぬ。そしておまえの胸の内には、信の心が輝いておる。天機の星は、純粹に智の星なのだ。おまえのように、類稀な武を有するわけではない。だが信の心は、おまえと同じほど有しているはずだ」

※王佐の才 王を援ける才能。または、王となる者を援ける才能。

※五旬 五十歳。

九天玄女が一息で言い終えた。

「天機の星は、誰なのですか」

公孫勝が訊いた。あれだけ拒んでいた天間の星を、今は認めているようだ。

「今はまだ分からぬ。その者が現れた時、すぐに分かる。そうとしか言えぬ」

「そうですか」

それ以上、公孫勝は訊かなかった。

「わたしは……どうしていいか分かりません」

雪華の声だった。消え入るようにか細い声だった。

「天魁の星よ。入雲竜が言ったように、今すぐ決める必要はないのだ。こう考えてはどうだ。おまえ達宋家党の総意を代表する。それは、おまえ一人の考えではない。おまえ達宋家党が決め、行う。総意を得るための核、それがおまえなのだ。そうは思えぬか」

九天玄女の言葉に、雪華は答えなかった。

「姉様」

「姉さん」

黄玉と曹瑛が、ほとんど同時に声を上げた。雪華は二人に、力ない笑みを投げかけた。

「黄玉、曹瑛、もう少し待って。まだ、心が揺れているの。こんなこと、一時の気まぐれでは決められないわ。だからお願い。もう少し、もう少しだけ待ってちょうだい」

雪華の言葉に、二人はただ頷くしかなかった。

・
・
・

整然と兵馬が並んでいる。左右に騎馬隊、中央には歩兵が十段、その後ろに、騎馬と歩兵の混成部隊が後詰として控えている。中央歩兵隊の最前列に、禁軍総大将らしき見事な甲冑を身に着けた將軍が、采配を振るっていた。

「あの大将、大したものだな」

陳達が、隣の聞起に話しかけた。

「総大将が最前列に出てくるなんて、よっぽどのことじゃないかな」

聞起も唸った。

「こんなものを見てると、勝てそうな気がしねえな」

陳達は一の木戸の前で、少し弱気になっているようだった。

「でも、勝たなくちゃ。どんなことがあっても、姉ちゃんを守り抜かなきゃ」

聞起は、下腹に力を入れた。

「そうだよな。ここまで来たんだ。最後まで頑張ることだな。若いおまえに諭されるようじゃ、俺もやきがまわったってもんだ」

陳達が、恥ずかしそうに聞起の目を見た。

「頭領、老いては子に従えと申しますぞ」

後ろから、董超が声をかけた。

「うるせえ、俺はまだ老いちやいねえよ。李達の兄貴より若いんだぜ。それにしても、聞起。おまえんとこの大将、いい女だなあ。姿容だけじゃねえ。何と言うか、話し方や心遣い、そんなもの全部ひっくるめて、あんないい女見たことないぜ」

陳達が、興奮気味にまくし立てた。後ろで董超が、笑いを押し殺している。

「そりゃあそうさ。姉ちゃんは最高さ」

聞起が自慢げに言った。

「他の二人もえらい別嬪だがな、あの大将の気品というか、その何だ、とにかく秀囲気には惚れちゃうな。もつとも、俺なんか惚れられち

や迷惑だろうがな」

陳達はそう言って、顎鬚を撫でた。

「姉ちゃんは、迷惑がらないとは思うけど、本気にしないと思うよ」
聞起の言葉に、たまりかねたように董超が大笑いした。

「この野郎、何を笑ってやがるんだ。薛覇、おまえもだ」

陳達が怒鳴り散らした。

「そんな。俺は笑ってなど……」

薛覇が言い返した。

「まあいい。これから始まることは、今まで経験したことのないもんだ。李逵の兄貴を信用するだけだ」

木戸の内側から、楊林が単騎でやって来た。

「砦の上から、光の合図が届きました。こちらの準備が整い次第、あちらに合図を送ることになります」

楊林の声は、生真面目そうに聞こえた。

「おい、楊林。仲間になったんだから、もう少し力を抜きな。今のままじゃ疲れちまうぜ」

陳達が言った。

「こちらの方は大丈夫だ。いつでもいいと、公孫勝様に伝えてくれ」
聞起が年上の楊林に、先輩のように振舞っているのが、陳達には

可笑しかった。楊林が、肯いて馬を返した。

「おい、聞起」

陳達が、可笑しそうに聞起に声をかけた。

「あいつ、錦豹子と呼ばれるだけあって、粋な格好してるじゃないか」

聞起は答えなかった。

「曹瑛と二人で馬に乗ってたところなんか、絵になってたな」

陳達が追い討ちをかけた。

聞起の目が、一瞬燃え上がった。

「陳達さん、いい加減にしてくれ。これから大事な戦が始まるっていうのに、こんなんじや集中出来ないよ」

「悪い悪い。何だか肩が凝っちまったんでな。ほんの冗談さ」

陳達は、悪びれるふうでもなかった。

「頭領、冗談がすぎますぞ」

たしなめるように、董超が口を出した。

禁軍歩兵部隊がじりじりと前進して来ていた。陳達と聞起はともに、左右の騎兵の動きに注意をはらった。歩兵部隊の後方に、雲梯※らしきものが見える。※雲梯 城壁に登るための長いはしご。

「ほう、とうとう攻城兵器を持ち出してきたか」

陳達が呟いた。

「ここまで持つてくるのに、まだ時間がかかりそうですね」

聞起だった。

「なあに、ここまでたどり着かせはしねえよ」

陳達が不敵な笑みを浮かべた。

少しずつ、本当に少しずつだが、決戦のときが近づいている。聞起は身震いするような緊張を感じ始めた。

・・・

李達は、満々と水を湛えた塘を眺めていた。自然の池に、土手と堰を造ったのは蘇源だった。もとの池の大きさは分からないが、堰き止めて塘となった今は、多くの人間を潤すだけの十分な水量があった。

「李達様、堰も大丈夫です」

後ろから声がした。

振り返ると、泥にまみれた寇汪が立っている。

「寇汪、よくやってくれた。感謝する。前におまえに言ったこと、儂の間違いだった。おまえ達は、邪魔などころか、立派な宋家党の仲間だ」

寇汪は、泥だらけの顔に笑みを浮かべた。寇汪の後ろでは、疲れきったのか、土手の草むらで宋伸が座り込んでいた。夜を徹して作業を進めていたのだから、疲れるのも当然と言える。水が一気に流れない

ように、丸太で組んだ新たな堰を造り上げた。丈夫な板など望むべくもなかったので、木を切り倒して堰の材料にしたのだった。丸太を縦に土に埋め込み、それを石で固めた。それだけでは水圧に負けるので、腕ほどの太さの荒縄を横に張って、それを土手に固定した。五本の荒縄が丸太を支えていた。荒縄は、馬の脚を掬うために、村人が持って来たものだった。戦に使わず、本来の用途に沿ったということだった。丸太の隙間は、土と小石で埋めた。丸太を使った堰は、宋伸が二つほど手がけていたため、作業は速やかに進んだらしい。

時遷が近づいてきた。

「李達様、こんなに早く造りあげるとは、大したものです。兵ではこうはいきません。土と共に生きる農民だから出来たことなのでしょう」

時遷の言葉には、心なしか尊敬の色が見受けられた。

「ああ、立派なものだ。これといった材料もないのに、こんな見事な堰を造り上げたんだからな。これを壊すのに、忍びないくらいだ」

「ですが、破らなくては」

時遷の言葉に、李達は黙って肯いた。

「私など、何も出来ずにうろろしていただけです」

時遷が、少し恥じたように言った。

「何を言っておる。時遷殿が辺りを警戒してくれていたので、皆が安心して作業出来たのではないか」

李達の言葉に、時遷が幽かに微笑んだ。

「それにしても、あの岩を斧で斬るとは、本当に驚いてしまいました」

時遷は、人の技ではないという顔をしている。

「斧で斬ろうと思ったら、出来そうになかった。心で斬ろうと思った。そうすると、出来ると感じた。ただそれだけのことだ」

李達の表情は淡々としていた。

「李達様ならではということですか」

時遷は、妙な納得の仕方をしていた。

「あの荒縄を切れば、堰は破れる」

李達が砦の方を指差した。

「一体、どれほどの水が落ちるのでしょいな」

時遷がぼつりと呟いた。

「分らん」

どれだけの兵士が濁流に呑み込まれるのだろう。李逵はそれを思っ
て、心が痛むのを感じた。敵ではあるが、お互い恨みなどない。何の
ために戦っているのか。ふと、そんなことを思ったりもした。

「かなりの水になるだろう。皆には、砦の横の林に入るように注意し
ておこう」

李逵は、村人と一緒になって働いている陳統を呼んだ。

「陳統、水の量が多い。必ず砦の左右の林に逃げるように言ってくれ」

陳統も、それに気付いていたようだった。

「任せてよ。すぐに砦に下りるよ。この量なら、林の中に逃げなきや
どうしようもない」

陳統は、すぐさま弦月に跨り砦に下りて行った。

「疲れを知らないんですかね」

「いいや、疲れているさ。ただ、嬢さんの顔を思い浮かべると、儂ら
は不思議と疲れを忘れる。そういうことだ」

李逵が確信を込めて答えた。

「そうですか。そうでしょうな」

時遷は再び、妙な納得の仕方をした。

陽は、まだ中天に達してはいなかった。いよいよだ。李逵は板斧
を握る手が、うっすらと汗ばむのを感じていた。